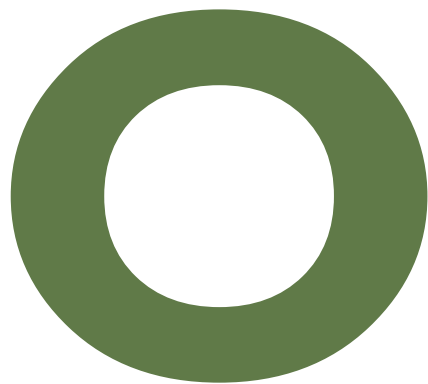




第7号 2014.4.20 発行
発行者：株式会社協進印刷
編集者：JO 編集委員会

古いものを使いながら生かす。 リビング・ヘリテージという 考え方があります。

カサイアーキテクチュラルデザイン

代表 笠井三義さん

阿井和男氏に師事し建築家としてのキャリアをスタート。2社の設計事務所を経て1994年に独立。(公社)日本建築家協会関東甲信越支部保存問題委員を2期4年務め、現在は同委員会相談役。歴史的価値のある建物を、壊すことなく現代のライフスタイルに合わせて活用していく方法を提案している。一級建築士、インテリアプランナー、応急危険度判定士など資格多数。
<http://www.ne.jp/asahi/kad/np/>



江森…笠井さんが取り組んでおられる「建築物の保存問題」について聞かせてください。

笠井…ここ30年ぐらいで、まだまだ使える建物が壊されることが多くなって来ています。ひどい話になると築20年足らずの立派なビルが壊されてしまう。そういう風潮に一石を投じるといふか、何もただ古い建物を遺しましょうということだけではなくて、無駄なことはやめて使えるものは有効に活用しようという提言活動をしています。江森…具体的にはどのような活動になりますか。

笠井…私が所属している(公社)日本建築家協会関東甲信越支部の保存問題委員会では、建物の所有者にその建物の価値を知って頂くために、「保存要望書」というものを出しています。私たちは建物というのは「社会資本」であると考えているんです。もち

ろん所有者が全権を持っているわけですが、街のランドマークになっていたり、人々の思い出の場所になっていたり、建物が社会的に担っている役割も大きいと思うんですね。

江森…横浜にも保存要望書を出している建物がありますか。

笠井…もちろんです。例えば横浜海岸教会であったり、あるいは三吉小学校。ここは関東大震災の復興小学校として37校建設したうちのひとつですが、震災直後の建物とあって耐震・耐火性能に優れていて、今でも若干の補強をすれば、ほぼ問題なく使えたはずなのです。

江森…旧三吉小学校というと、その後横浜市大の医学部も使っていた校舎ですね。最近ついに解体されてしまいました。

笠井…そうですね。実際には保存要望書を出してもうまくいかない、つまり壊され

てしまうケースがほとんどです。特に横浜は江戸末期の開港によってできた街で、赤レンガ倉庫なんて一番古い方ですが、それでもせいぜい百年ぐらいです。普通はお城とか、お寺とかも古い建物がありますから、建物のほとんどが百年未満という街は珍しいのです。それだけに解体の案件も多いんですよ。

江森…そうですね、それは意外ですね。

笠井…そういうこともあって、4、5人の仲間と一緒に横浜の歴史的建築を調べて「横浜近代建築」という本を出版しました。この本にも載っていますが、約30年前に調査したときに横浜に90棟ぐらいあった歴史的な建物が、この30年間で57パーセントが取り壊されてしまいました。

江森…えっ！そんなに。

笠井…そうです。私たちは何が何でもレトロがいいなどと言っているのではなく、リ

ニューアルしながらでも遺して使っていくことで、街の「厚み」とでもいいたしか、文化が醸成されていくのではないかと考えているのです。そのような考え方を「リビング・ヘリテージ」といいますが、歴史的な遺産をガラスの箱に入れて飾っておくのではなく、使いながら遺していくという考え方ですね。

ヨーロッパなどでは古い街は極力手をつけませんよね。ドイツでは戦災で壊滅してしまった市街地をすべて昔の通りに復元した街があるほどです。一方でロンドンのカナリー・ワフやパリのラ・デファンスのように、新しい建物を建てることと決めた地域には近代的な超高層が立ち並ぶといったようなこともする。日本にもそうした考え方があっても良いのではないかと思いますね。

江森…建築家という職業はまさに建物を設計するところにあるわけですから、



新しい建物がどんどん建った方が商売としてはいいような気がするのですが、建築家の皆さんが「保存」を推進するのはどうしてなのでしょう。

笠井…例えばウィーンなんていう街は絶対に新しい建物を建ててはいけない地区というのが厳然とあるわけですが、そこにも建築家はいるのです。制約が多いがゆえに「私はインテリアしかやらない」といったように逆に先鋭化されてきて、自分が得意な分野を伸ばしていける環境ができています。

これは考え次第で、大きなビルを建てるのが喜びという建築家もいれば、ドア1枚にこだわって突き詰めていく建築家もいるし、古い建物をいかに上手く活用するか、もっとというと安普請をいくらか作ったって仕方ないでしょと考える建築家もいるということですよ。

江森…安易に新築を選んでしまうというのは、建物の所有者の社会的責任というか、「社会資本の持ち主」としての自覚が足りないということでしょうか。

笠井…それもありますが、最も問題なのは法律がコロコロ変わってしまうということでしょう。例えばオリンピックが来るからここの土地の容積率を倍にしましょうとか

▲横浜らしい雰囲気を感じ出す、中区吉田町の「吉田町ビル」。



てしまう。そのことが問題の根本にあると思いますね。

横浜には震災復興建築と並んで震災復興建築というのも多数遺っているのですが、目の前にある吉田町ビル（写真右）もそうですが、戦後米軍の接収が終わった頃から横浜市の都市計画に沿って、土地の所有者たちが共同で建てたものなのです。1階が店舗、2階が事務所、3、4階が住居を基本構造とする4階建ての耐火建築のビルが街区を囲うように建っていて、火災の際に延焼を防ぐ役割も果たしています。1階は天井高が高いので、最近はおしゃれなバーなどが入居して街の雰囲気づくりに一役買っています。

このような震災復興建築はまだ200棟ほど残っていますが、これも法律が変わることによって取り壊されてしまう可能性もあります。

江森…吉田町が変わってしまったのは個人的にはとても困りますね（笑）。

笠井…法律さえ変わらなければ今のままでやっていくしかないの、なんとかデザインを工夫して、まさに宝石をはめるがごと

くにリニューアルしていけば、東京とも他どの街とも違う横浜らしい街並みが維持できると思います。

江森…私が心配していることのひとつに、最近みなとみらい地区にできている高層マンションが、50年後、100年後にどうなってしまうのかということがあります。壊すにしても建て替えるにしても大変なことだと思つのですが…

笠井…技術的には何ら問題はないと思いますが、問題は住民でしょうね。高層マンションの上層階というのはいわゆる「億ション」でしょ。でも当然40階があれば2階も3階もあるわけで、上の人は余裕があるけど、下の人はローン地獄でとても建て替えなんて無理、ということとは起こりますよ。

江森…それで結局ゴーストタウンみたいなことにならなさいいいけど…とか余計な心配をしていますが（笑）。

笠井…集合住宅というのは、様々な年齢層所得層の人たちがひとつの建物に一緒に住んでいるわけですから、それを「街」として評価していかないとけないのだと思います。北欧などでは、共用のリビングスペースがあったり、食事の支度が当番制であったりと、多様な年齢層、多様な境遇の人たちが互いに助け合って暮らす集合住宅のス



▶笠井さんの仕事場がある「都南ビル」。昭和3年に建設され、都南貯蓄銀行、静岡中央銀行など代々銀行が入居していた。

タイルが確立しています。そういうところはまだまだ日本は未成熟なのかなと思いますね。

江森…住む人、造る人、両方に問題がありそうですね。

笠井…建築家というのは学者ではないので、依頼されたこと

に対して一生懸命図面を引くのが仕事ではあるのですが、集合住宅の問題ばかり、保存問題にしても、何かおかしいなあと感じることは多々あるのです。

しかし、特に姉歯事件以後は確認申請の書類が膨大な量になってしまつて、その土地の風土や住む人のライフスタイルに合わせた建築をしていく上では、施主にも設計者にも負担が大きくなっているのは否めません。それに比べて工場で検査を通ったユニットを組み合わせて建てるハウスメーカーの家は、1回の申請で大量生産できますから、効率という面ではかきませんね。**江森**…それで、全国どこに行っても同じ家、同じ風景ということになってしまつたのですね。あれはいただけません。

笠井…近隣の調和とか、風の流れとか、ハウスメーカーはいちいちそんなことまで考慮してられませんからね（笑）。

少しづつではあっても、おかしいなと思つたことに対して、自分の仕事を通じて、何ができるかということを、これからも考えていきたいと思っています。

江森…まさに建築家としての社会的責任（CSR）ですね。今日はとても貴重なお話をありがとうございました。



横浜デジタルアーツ専門学校×サクセスオート湘南×協進印刷 産学共同でママさん向けドライブマップを制作

クールヨコハマプロジェクトの一環で昨年の5月より横浜デジタルアーツ専門学校の学生さんと鎌倉市の自動車販売会社サクセスオート湘南さんと共同で制作してきた作品がようやく今年の1月に完成しました。

その名も「ママドラマップ」

若者のクルマ離れがささやかれる昨今、子育て中のママさんたちにもっと気軽にドライブを楽しんでもらおうと、湘南三浦横浜地域の無料で駐車できるスポットを調べてマップにしまし

た。

プロジェクト開始当初は自動車販売でどんな付加価値サービスを作ることができるかを検討していましたが、ミーティングを重ねるうちに価格や性能を誇張するような販促広告をするよりも、地域に必要とされるような会社としてのあり方に議論がシフトしていきました。そこで神奈川県県民局NPO協働推進課さんやNPO法人藤沢市市民活動推進センターさんにもミーティングに加わっていただき、地域の課題解決

に役立つコンテンツを盛り込んだマップ制作の方向性が見えてきました。

ドライブスポットの調査では、地元に詳しい方へのリサーチから、実際に子供連れで現地へ訪問する等、学生さんに対しても多様な経験を提供することが出来ました。このマップがきっかけとなって、普段家事や子育てに忙しいママ



さんたちにも、買い物や子どもの送り迎えだけでなく、お散歩感覚で子どもとドライブを楽しんでもらえたらと思います。

現在このマップは限定数

で県立観音崎公園さんと、これから子育てを控えるママさん向けにと横浜市南部病院さんに設置協力いただいております。もちろんサクセスオート湘南さんと協進印刷にも設置しております。ご興味の方は是非お手にとってみてください。



第一回「看取り」 文 江森克治

今年もプロ野球が開幕した。我が横浜DeNAベイスターズも遅ればせながら本拠地開幕を迎え、春休みということもあって、球場周辺は華やいだ空気に包まれている。そんな「ハマススタ」から海とは反対側に5分ほど歩いたところ、場外舟券売場の真新しい白いビル

の裏側一帯が、このコラムの舞台「寿町」である。大通り沿いこそ新築のマンションが目立つようになっ



りてきたものの、通りを一本入れば「○○荘」などの看板を掲げた簡易宿泊所「ドヤ」がびっしりと立ち並び、街の雰囲気は一変する。

寿町で生活困窮者支援に取り組んでいるNPO法人さなぎ達。1983年に起きたホームレス襲撃事件後に始

まった夜回りボランティアの活動をきっかけにして2001年に法人化。現在は寿に暮らす人たちの「居場所」づくりや相談業務のほか、独居高齢者の見守り、障がい者の作業所の運営など幅広く活動している。

寿町を抱えている課題のひとつに、ここを最期の地と決めた独居高齢者の「看取り」の問題がある。そんな看取りのボランティアを長年続けているさなぎ達のメンバー川崎泉水さんは自身の体験を次のように話してくれた。

「私は学生の頃から寿に関わるようになったのですが、本当にたくさんさんの思い出があります。ここにいる方の多くはかつて日雇労働者だったもので、自分が活躍していたころの話、オレがベイブリッジを

造ったんだとか、そんな話を楽しく聞いていました。

あるとき、いつもよくしゃべる人だったんですけど、その日はいつも増してはつきりと良く話してくれて、そうしたら『もうおじさんのことはいいから、ここには来なくていいよ。幸せになれよ、オレみたいな男につかまっちゃダメだ。』なんて言ったと思ったら、『あー、疲れた、田舎に帰りたい。』って言い出して。そのとき、あ、もしかしたら最期が近いのかな？って感じて、ドヤを出てから涙が止まりませんでした。そうしたらその後その人ドヤからいなくなってしまうって、なんか嫌な予感がしてみんなですごく心配したんですけど、1ヶ月後ですかね、品川の路上でご遺体で発見されたんです。

すごくショックでしたけど、そのときはじめて、生きていることとか、死ぬこととか、それまで考えもしなかったことを身近に感じました。これまでたくさんの人を看取ってきましたけど、そのひとり一人からたくさんのお話を学ばせてもらいました。」

寿で最期を迎える人の多くは、老後の備えもせずに気ままに生きて来た人たちだろう。そのような人たちが非業の最期を遂げたとしても、同情の余地はないとする考え方もあろう。しかし、たとえどんな人であつたとしても、ひとりの人間の最期をどれだけ大切に、そこに向き合えるかということが、同じ人間としてとても大切なことのように思えてならない。



なごみカフェ

大口の魅力を紹介する「大口自慢」今回ご紹介するのはオープンから7年目を迎える「なごみカフェ」さんです。

カフェスタイルにこだわるオーナーの水村さん。カフェとは、「子どもからお年寄りまで、誰でも気軽に立ち寄ることができ地域の交流スペースであり、カタにはまらず人と人が繋がりを生む多目的な空間」とのこと。クレープを買いにくる小学生から、ランチには近隣のOさん、夜には商店街の若旦那がちょっと一杯と、なるほど客層も目的も様々。



研修生の大野さん制作のバレンタインカードを置いていただきました。

そんななごみカフェの一番人気は「日替わりパスタプレート」。サラダ・スープ・パン付きで900円。見た目は上品な盛りつけですが、食べてみるとボリュームがあります。またデザートでは「苺ミルフィーユ・カスタード&生クリームクレープ」が子どもから大人まで幅広い層に人気とか。

当社から歩いて1分！地域の皆さんに向けた「ありがと」の「バレンタインカード」企画にご協力いただいたり、職業体験学習では女子中学生を連れてランチに行ったりと、日頃から何かとお世話になっているなごみカフェさん。大口でなごみのひとときをお過ごしください。



大口初上陸！？ブルーシールアイスも。

Kyoshin TODAY

2013 AGFA Sublima Contest 「President Prize」 授賞

日本アグファ・ゲバルト

株式会社主催する「2013 AGFA Sublima+印刷コンテスト」の印刷技術部門に於いて社長賞をいただきました。受賞作品は某化粧品メーカーのパフレット。化粧した感を出し過ぎず、かといってスッピンでもない、微妙な肌の色を表現するため、細部にまでこだわり慎重に色調整を行いました。同コンテストでの受賞は二度目ですが、他でもない「技術」を評価していただいたことで、苦勞が報われた思いがしました。



授賞式で受賞者の皆さんが異口同音に話していたのが、「日頃からのメンテナンスが大切」ということ。常日頃より機械の清掃と調整を欠かさない我が機械に、感謝と尊敬の気持ちを新たにしました。「今回は金賞を狙う」とすでに視線は来年に向けられています。

台湾国際企業人材育成センターの インターンシップを実施

今年で4回目となる台湾国際企業人材育成センター（I-T）からの研修生受け入れを、1月23日から2月12日の約3週間の日程で実施しました。今年の研修生は李佳穎（りかい）さん。小柄でとてもチャーミングな女性です。李さんは昨年の研修に来た洪さんの大学の後輩で専攻も同じということもあり、事前に会社のことと良く調べていて、社員ともすぐに打ち解けることができました。

I-Tは台湾政府の外郭団体である台湾貿易センターが運営する教育機関で、台湾経済の生命線ともいえる貿易ビジネスで活躍できる人材を育成しています。それだけに学生たちもとても意欲的です。

今回は優秀な李さんの好奇心を満足させるべく、少し難しい課題に挑戦してもらいました。それは横浜にある台湾系の企業に対して、協進印刷のプレゼンテーションをするというもの。中華街の老舗三和楼の大槻さんにご紹介いただいた横浜華僑総会の桐山会長と、媽祖廟の大山事務局長にご協力いただき対面でのプレゼンテーションを敢行。さすがに日本語では難しいので中国語でのプレゼンとなりましたが、当社の理念や活動内容をよく勉強し、資料作成から当日のプレゼンテーションまで立派にやり遂げることができました。



2013年度CO₂および産廃 排出量・リサイクル量

排出

項目	排出量	前年比
CO ₂	29.5t	82.6%
廃油	0.25t	88.0%
廃アルカリ	0.1t	61.3%
廃プラ	0.07t	124%
事業ゴミ	3195ℓ	182%

リサイクル

項目	排出量	前年比
紙	23.5t	76%
アルミ	1.7t	92%

JO（ジェイ・オー）2014年4月号（第7号）
発行者：株式会社協進印刷
横浜市神奈川区大口仲町108番地
TEL：045（431）6611
FAX：050（3730）6273
URL：http://www.kyoshin-print.co.jp

